

Stylistique linguistique/Stylistique littéraire

田中, 栄一

<https://doi.org/10.15017/2332761>

出版情報 : 文學研究. 70, pp.47-61, 1973-03-25. 九州大学文学部
バージョン :
権利関係 :

Stylistique linguistique/ Stylistique littéraire

田 中 栄 一

Stylistique は今もなおその確然たる定義をもたず、その領域も曖昧模糊としている。それどころか、えたいの知れない“serpent de mer”⁽¹⁾であるとか、あるいは“vesse de loup de la philologie”⁽²⁾などと悪評高い。Stylistique をここまで追い込んだ理由として考えられるものには、歴史的観点からすれば、特にフランスにおいて、長期間にわたる古い Rhétorique の支配、主観的印象批評の根強い力、a priori な美的評価の隠然たる存在などが挙げられる。またこの“Science du style”であるべき Stylistique 自身のもつ内的な理由として、その対象とするところが、大部分は文学作品であるところから厳密な mécanisme を必要とする広い意味での構造言語学の一分野の位置を保つことが困難であったことが、上の理由の大きなものとして考え得る。そして遂には、*Langue française* 誌第3号における M. Arrivé の言となるのである。

La stylistique semble à peu près morte……Les collaborateurs mêmes de ce numéro de stylistique semblent à peu près tous persuadés de la mort de la stylistique; l'un d'eux va jusqu'à le dire explicitement, la plupart des autres le sous-entendent, et leurs travaux s'écartent de la stylistique au sens strict pour se répandre dans diverses directions voisines:……⁽³⁾

このような絶望的観測は、勿論“manie théorisante”⁽⁴⁾の結果である

-
- (1) J. Dubios et al. : *Rhétorique générale*. (1970) p. 13., note. 22.
 - (2) *le Français moderne*. (1972—N°. 1.) p. 1.
 - (3) *Langue française* N°. 3. (sept. 1969) p. 3.
 - (4) *Ibid.*, N°. 7. (sept. 1970) p. 3.

ことは否めないが、*Stylistique* の漠然たる領域、その方法論の多様性、あるいはいわば方法論の非存在などからの当然の帰結であるといわざるを得ない。仮に過去に方法論なるものが存在したとしても、現在その方法論そのものが問題化している。M. Arrivé はそうした *Stylistique* の方法論の総称を、“description du texte littéraire selon des méthodes linguistiques”⁽⁵⁾ といっている。そのあと論を進め、*Stylistique* の “Postulat” を検討したあと、最後の結論として、*Stylistique* は “description linguistique du texte littéraire” と定義付けるべきであるとしている。このような冒頭と結尾における、*Stylistique* の意味、内至は定義の変化の裏には、論者の基本的態度が存在するものと考えられる。即ち、それは、あくまで伝統的な、*linguistique* 的方向性をもつものであり、また視点をかえれば、次の二つの事柄、一つは言語学的方法が文学作品を再考させる契機となる、ということと、他方、言語学的方法が、文学作品を記述する場合に “pertinent” であるということとは異った事実であることを、上記の論述の推移は証明しているものと考え得る。また論者は、文体論的方法を、言語（学）的方法として提起しているということも認めねばならない。

M. Arrivé のこのような絶望論に対して、種々批判が出てくるのは当然であろう。その一つの場合が B. Dupriez の提言である。彼は *Stylistique* が消滅するというが、一体どの *Stylistique* であるのかと問う。

La revue *Langue française* annonçait dans son numéro de septembre 1969 la mort prochaine de la stylistique. Peut-être... Mais de quelle stylistique? Il nous semble, au contraire, qu'il faut espérer d'une stylistique renouvelée la réconciliation des critiques et des linguistes, de l'intuition et de la méthode.⁽⁶⁾

B. Dupriez は、むしろ新しくなった *Stylistique* から、批評家と言語学者との和解が生ずるものと期待さえしている。そして *langue* と *style*

(5) *Ibid.*, N°. 3. p. 4.

(6) *le Français moderne*. (1971—N°. 4.) p. 336. s.q.q.

との間の境界が消滅する傾向を示唆している。M. Riffaterre もフランスにおいて特に、文体論的研究が文学作品を分析する際に、この *langue* と *style* の二段階に区分して分析を行っていることを指摘し、この *dichotomie* の有効性とその効果に疑問をはさんでいる。即ち彼は “*langue d’auteur*” なるものを設定する。これは Saussure の言う “*langue*” ではなく、作家がその “*langue*” から既に吸収した表現手段の総体を指すものであり、“*style*” との識別は不可能に近いとする。⁽⁷⁾

とにかく、B. Dupriez や M. Riffaterre の説は、現在の *Stylistique* の方向を示すものとして検討の価値があるが、今はより基本的な問題から考察を進めて行きたい。

Stylistique littéraire なる概念は、まず Ch. Bruneau のいう言語の領域から外れない *Stylistique pure* の対立概念として生れたものであった。*Stylistique linguistique* の一つの定義を示せば次の如くである。

C'est l'étude des variantes idiomatiques dont dispose la langue, surtout la langue parlée, pour désigner un même objet ou un même être, exprimer une même idée, en fonction de l'état d'esprit, de l'appartenance sociale, de la situation momentanée du parleur.⁽⁸⁾

上記の引用は、Ch. Bally の *Traité de Stylistique française* を念頭に置いて書かれた H. Mittérand の定義である。Bally のいう “*effets de style*”, あるいは “*expressivité*” は、現在の概念に置換すれば “*connotation*” と同義に解されるものであり、彼の *Stylistique* は一語にしていえば、言語のもつ “*affectif*” な面の研究にあったといえる。更に彼の出発点が古い *Rhétorique* の “*figures*” にあったこと、また文学語を除外したことなどがその方法論の限界点であったといつてよい。⁽⁹⁾ この

(7) M. Riffaterre : *Problèmes d'analyse du style littéraire*. pp. 95.—99. in *Essais de Stylistique structurale*. (1971)

(8) *le Français dans le Monde*. N°. 42. (juillet-août. 1966) p. 13.

(9) A. Henry は Bally がその著 *Traité de Stylistique française* に “*Stylistique*” なる語を用いたことを不満とし、Bally のものは “*une partie d'une linguistique de l'expressivité*” であるとしている。

Bally の *Stylistique* の発展的系列に J. Marouzeau の *Précis de Stylistique française* や M. Cressot の *Style et ses techniques* などがある。両者とも文学語の “expressivité” の *grammaire* を構成している。J. Marouzeau の *Précis*… は、全く伝統的な区分、即ち “sons”, “graphie”, “mot”, “catégories grammaticales”, “construction de la phrase”, “agencement de l'énoncé”, “énoncé versifié” といった区分に従い、作家のこうした領域内での表現手段の研究であり、いわば、*Stylistique générale* といえよう。次に M. Cressot のものは、彼によれば、文学作品もやはり一つの *communication* であり、作家の *style* は *langue parlée* におけるよりも *langue littéraire* においては更に *volontaire* なものであり、*consient* なものとなるから、*Stylistique* の対象となり得るとしており、この点で Bally と訣別している。但し、*Stylistique* の最終目的は文学的 *style* の研究ではなくて、表現の選択を支配する法則を発見することにあると付言している。

上記の如き J. Marouzeau や M. Cressot をその代表として挙げた *Stylistique* は、いわゆる文学語をその対象とした点では *Stylistique littéraire*⁽¹⁰⁾ と言い得るが、例えば、M. Cressot は Bally と訣別したとは言いながら、M. Arrivé の定義する “description du texte littéraire selon des méthodes linguistiques” の意味からすれば、やはり *Stylistique linguistique* に属するものと見做さざるを得ないのである。

さて、*Stylistique* が *linguistique / littéraire* という *dichotomie* をなすに至った契機は周知の如く構造言語学の発達と、いわゆる *formel* な分析による文学作品の研究の氾濫によるものであるのだが、一方、伝統的な “norme” と “écart” の問題に固執する “linguistes” の種々の定義付けにもかかわらず、いずれもその原則そのものの弱点をさらけ出したに過ぎず、遂には *approche linguistique* を放棄し、再び文学にその研究領域を委ねるに至らざるを得なかったという状況にもよるものであった。これは R.L. Wagner をして1960年に既に “désordre insensé” と言わしめた状況でもあるのだが、G. Antoine の *Stylistique des formes et Stylistique des thèmes, ou le Stylisticien face à l'ancienne et à la nouvelle critique*. (1966) がその間の事情を理解する助けとなる。

(10) *le Français dans le Monde*. N°. 42. における H. Mitterand の分類。

G. Antoine のいう Stylistique は “Stylistique des formes” と “Stylistique des thèmes” とに分けられる。前者の定義は次の如きものである。

…la stylistique des formes prend pour point de départ le seul *donné* au sens strict, qui est soit l'ensemble des moyens d'expression dont se compose une œuvre, soit tel de ces moyens d'expression considéré comme plus spécialement “pertinent”.⁽¹⁾

即ち文学作品の “signifiant” の内部構造を研究の対象とするものとして規定している。

次に後者の定義を見る。

…au lieu de s'attacher d'abord à l'analyse des signifiants, pour de là remonter aux signifiés, elle entend aller droit à celle des signifiés et refaire en somme le chemin qu'a suivi l'artiste.⁽²⁾

即ち直接 “signifié” を研究の対象とするものである。

前者の中に、Ch. Bruneau, J. Marouzeau, G. Devoto, L. Spitzer, P. Guiraud, 初期の M. Riffaterre の名がある。後者の中には、R. Barthes, G. Poulet, J-P. Richard, J. Starobinsky, 更に、G. Bachelard, M. Foucault, J-P. Sartre の名まで列挙されている。また後者は二つに分類し得る。その一つは、作品の主たる thème に忠実に従い、その表現方法を分析するものである。その二は、作品の thème を模索し、遂には分析者自身が批評家の機能を持つに至り、読者の立場から第二の作者の立場へと移行し、自己自身の thème の追求分析へと発展するものである。G. Antoine も言及しているが、R. Picard の *Nouvelle critique ou nouvelle imposture* (1965) と、R. Barthes の *Critique et Vérité* (1966) との間の論争の中心点は、subjectif/objectif が問題と

(1) *Les chemins actuels de la critique.* (1968) p. 160.

(2) *Ibid.*, p. 164.

なる上記の thème の取扱い内至は処理方法にあったのである。とにかくこの G. Antoine の決断的な Stylistique の拡大解釈、即ち Stylistique と Critique littéraire との間の壁を取り払ったことは、逆説的に M. Arrivé の絶望論と軌を一にしている。

G. Antoine は P. Imbs とともに、*le Français moderne* 誌の directeur であるが、1971年第1号の“*Au lecteur*”において、その編集方針を述べている。この雑誌は周知のように特に Stylistique が対象となっていないが、先に記した G. Antoine の一貫した基本的態度を読むことができる。即ち、Stylistique と呼ばれるものを次の如く三つに区別する。

- 1°. sémiotique ou description strictement linguistique des textes littéraires.
- 2°. stylistique des procédés et des effets, inscrite dans une synchronie beaucoup plus large.
- 3°. analyse méthodique des thèmes et de leurs moyens d'expression.

この第三のもの、thème とその表現方法の分析に問題点を置く Stylistique が linguistique / littéraire の対立をなす。

論を少し遡らせて、G. Antoine の先述の Stylistique の拡大解釈に戻るが、そのような問題解決方法に対して、M. Arrivé は“colonisation excessive”⁽¹³⁾ だとして不満の意を表明している。また Cl. Tatilon も特にいわゆる“critique thématique”は偶然に Stylistique になり得ることはあっても、根本的には、“critique d'interprétation”であり、決して Stylistique の領域には含まれない旨を表明し、“Stylistique des formes”と“Stylistique des thèmes”といった分類自身、何ら根拠のない分類であるとして反論している。⁽¹⁴⁾

Stylistique の分類法に、対象となる文学作品を中心として、一方その

(13) *le Français dans le Monde*. N°. 71. (mars. 1970) p. 11. (cité par Cl. Tatilon.)

(14) *Ibid.*, p. 13.

作品と作者との関係においてとらえるものと、他方作品と読者との関係において研究するものとに分類する方法がある。Cl. Tatilon は前者を“Stylistique des intentions”, 後者を“Stylistique des effets”と呼び、⁽¹⁵⁾ P. Guiraud は“Stylistique génétique”, “Stylistique descriptive”と名付ける。⁽¹⁶⁾ 前者を主張するものは J. Mourot であり、後者の場合、その代表的なものは M. Riffaterre である。

J. Mourot は“bien lire”が Stylistique の第一条件であるとして、次の如く続ける。

...bien lire, c'est chercher à savoir ce qu'une œuvre veut; c'est-à-dire et ce que l'auteur a voulu et ce qu'il ne savait pas qu'il voulait; c'est aller des intentions connues aux effets correspondants, tirer de la convergence remarquable d'effets apparemment moins calculés la supposition d'autres intentions qui, à leur tour, aident à découvrir d'autres effets.⁽¹⁷⁾

作品と作者との関係、即ち作品の génétique な研究は“style”を意識的、無意識的を問わず、ある意図の結果と見る。そのために“variantes”や“corrections”の研究に重点が置かれ、texte の中に作者の個性的指標を見んとするものである。他方これに対する位置に M. Riffaterre がいる。彼は作品そのものと、その作品の成立過程とを混同してはならぬと主張する。即ち文学作品の生みの悩みは何らその価値基準とはならないとする。読者は生成の段階ではなく、作品の最終の形だけを見る。そして作者の意図なるものは、非常に不確実な基準であり、“variantes”の研究は従って“apriorisme”であると論じている。また別の機会に上記の態度を確認している。

L'apport de la stylistique à l'explication du phénomène

(15) *Ibid.*, p. 14.

(16) P. Guiraud : *Essais de Stylistique*. (1969) p. 30.

(17) *le Français dans le Monde*. N°. 71. p.15. (cité par Cl. Tatilon.)

(18) M. Riffaterre : *Problèmes d'analyse du style littéraire*. p.p. 95.—112. *Vers la définition linguistique du style*. p.p. 113.—144.

littéraire me semble essentiellement de mettre en lumière que ce phénomène se situe dans les rapports du texte et du lecteur, non du texte et de l'auteur, ou du texte et de la réalité. Par conséquent, contrairement à la tradition, qui aborde le texte de l'extérieur, l'approche de l'explication doit être calquée sur la démarche normale de la perception du message par son destinataire: elle doit aller de l'intérieur à l'extérieur.⁽¹⁹⁾

* * *

これまで Stylistique の相反する カテゴリーの面から考察を進めて来た。即ち, forme / thème, effet / intention といった方法論における差異を検討して来た。これは Stylistique の一応の schéma として確認の必要はあった。linguistique / littéraire の対立は, より global な視点に立った場合, 起るべき対立である。先にも記した G. Antoine と P. Imbs の提起した Stylistique の第三のカテゴリーにはいるもの, 作品の thème とその表現手段の方法論的分析に linguistique / littéraire の境界がある。というよりむしろ方法論の相違ではなく, terminologie の差異にしか過ぎないと考えられる。T. Todorov はこの二つの Stylistique は, 互いに “signifiant” であり “signifié” であるとしている。⁽²⁰⁾ こうした流れの先駆者的存在は R. Jakobson である。⁽²¹⁾ 彼の “message” の構造的機能に重点を置いた方法論が大きな影響を与えたことは周知の事実である。Cl. Lévi-Strauss との共同による Baudelaire: *Les Chats* の分析は, その反響の大なることで余りにも有名でありここに再び解説の必要はない。が, ただ次のことを記すにとどめておく。R. Jakobson の方法は, texte の言語学的なあらゆる要素の全体的な記述であって, そうした各要素を結び付ける関係を構成することにあつた。即ち texte は, 一つの “fermé” な構造であり, その内部において各記号が諸関係の “système”

(19) *l'Enseignement de la littérature*. (1971) p. 335.

(20) T. Todorov : *Les études du style*. in *Poétique* N°. 2. (1970) p.p. 224—227.

(21) R. Jakobson : *Essais de linguistique générale*, traduit par N. Ruwet. (1963)

を構成していて、そこから各記号の効果が生れて来るのである。この方法論を基とした分析は現在数多く、全く枚挙に遑がないほどである。しかし反面批判もかなり多い。その一つの例として I.-M. Frandon^② のものを検討する。

先ず次の点では R. Jakobson の分析に同意する。

L'œuvre littéraire est un ensemble dont les éléments sont dépendants les uns des autres. Plus l'œuvre est littérairement achevée, plus les éléments composants sont liés par une nécessité interne. Si l'un des éléments est modifié, le caractère de l'œuvre est modifié et, par suite, son équilibre, sa signification.^③

しかし、*Les Chats* において最も問題の多い二行^④ について R. Jakobson と Cl. Lévi-Strauss は “à dessin ambiguë” であると言っている。これに対して Frandon は、二人の分析者が作者 Baudelaire に何らかの “intention” のあった旨を暗示しているとしてこれを問題視しているのである。Frandon の論点は、文学作品を一つの “système” と見做すならば、その作品はやはり一つの “artefact” であって、この “artefact” を生み出す意図は、その意図を生み出す者に属するものであるとする。そしてこの “artefact” やその構造の検討は、現実に生産された “objet” ばかりではなく、その起源にまで遡らねばならない。人間活動の

② I.-M. Frandon : *Le structuralisme et les caractères de l'œuvre littéraire à propos des “Chats” de Baudelaire.* in *Revue d'Histoire littéraire de France.* (72^e année—N°. 1.)

なお R. Jakobson と Cl. Lévi-Strauss の *Les Chats* の分析は、本文でも述べた如く、フランスはもとより海外においても大きな反響があったことは既によく知られている。この分析に関係する批評の主なるものを拾ってみても、G. Mounin, G. Durand, L. Goldman あるいは L. Cellier らの名が列挙される。また N. Ruwet の例えば *Je te donne ces vers...* の分析 (*Poétique* N°. 7. sept. 1971) はその影響の一つである。とにかく、こうした一連の分析は Stylistique の大きな一つの方向を示すものとして注目に価する。

③ *Ibid.*, p. 103.

④ L'Erèbe les eût pris pour ses coursiers funèbres,
S'ils pouvaient auservage incliner leur fierté.

生産物は、一つの“projet”を表わす。故に作者の存在を示すものである。作者の“projet”内至は“intention”を明らかにすることは、文学批評の一つの道であると論じる。もっとも文学作品の起源、その成立過程を明らかにすることは、特殊な場合を除いて不正確さが残る。しかしその不正確が一つの規則となるのである。R. Jakobsonの方法による構造の決定にもやはりその決定が部分的であるという欠陥を持ち、反論の可能性を残すものであることを考慮せねばならぬとする。

以上 Frandonの主張するところを検討したが、これは作品の“effets”に重点を置くか、あるいは“intention”を打ち出すかという先に記した Stylistiqueの根本問題に帰納し得る。

次に M. Riffaterre も R. Jakobson と Cl. Lévi-Strauss の分析を追いながら、自己の分析をそれに重複させて批判を行っている。⁽²⁵⁾ M. Riffaterre の批判を検討し同時に彼の方法論を考察してゆく。R. Jakobson, Cl. Lévi-Strauss の方法は、詩の中において明確にし得る構造的 système は、それ自身詩的構造であるという前提に立っているのであるが、しかし、詩の中には、文学作品としての詩がその機能と効果を見せる時にも、何ら役割を果さない構造が存在するのではないだろうか。また構造言語学がそのような“non-marqué”な構造(microcontexte)を、文学的役割を果している構造つまり“marqué”な構造から識別し得るのであろうか。“langage poétique”の特質に不適合な方法を使用することは、決定的に詩的構造を無視することにならないであろうか。このような問題を M. Riffaterre は自らに課しているのである。これらの課題を解決する方法が、そのまま彼の方法論なのである。

M. Riffaterre は、文学作品は芸術であり、同時に言語であるという両面をもつものであると見做す。そしてこの同じ一つの現象の両面を結び付ける諸関係が、いかなる本質をもつものであるかを先ず検討する。彼は“fait stylistique”と“fait linguistique”を次の如く識別するのである。

…les faits stylistiques ne peuvent être appréhendés que

(25) M. Riffaterre. *op., cit.* : *La description des structures poétiques : deux approches du poème de Baudelaire, “les Chats”*. p.p. 308—364. cf. *Le poème comme représentation.*, in *Poétique*. N°. 4. p.p. 401—418.

dans le langage, puisqu'il est leur véhicule; d'autre part il faut bien qu'ils aient un caractère spécifique, sinon on ne pourrait les distinguer des *faits linguistiques*.⁶⁶⁾

こうして *traits stylistiques* を表す要素を選別する。特に種々の *traits stylistiques* の特定の個所への集中現象を“convergence”と呼び、これに重点的な検討を加える必要がある。次にこれらの *traits* を他の要素から切り離して言語学的に分析する。その時初めて“langue”と“style”の混同を避け得るとする。

またいわゆる“style littéraire”を次の如く規定する。

Par *style littéraire*, j'entends toute forme écrite individuelle à intention littéraire, c'est-à-dire le style d'un auteur ou, plutôt, d'une œuvre littéraire isolée, ou même d'un paysage isolable.⁶⁷⁾

上記引用文中の“intention”はもちろん作家の言わんとしたことではないことは明らかである。従って上文は、*texte* のある性質により、*texte* 自身を芸術作品と見做すべきであり、単に語の連続と見るべきでないことを表明している。

M. Riffaterre の方法論のも一つの重要な点は、先にも少し触れた“microcontexe”と“macrocontexe”の設定である。前者は構造の内部にあり、“marqué”な構造と *contraste* をなす“non-marqué”な構造であり、後者は構造の外部にあり、“marqué”な構造に対する“non-marqué”な構造(要素)である。⁶⁸⁾

以上、R. Jakobson と Cl. Lévi-Strauss 共同の分析を中心として、それに対する批判、それに続いて M. Riffaterre の方法論を見て来たが

⁶⁶⁾ *Ibid.*, *Critères pour l'analyse du style*. p. 28.

⁶⁷⁾ *Ibid.*, p. 29.

⁶⁸⁾ *Ibid.*, *Le contexte stylistique*. p.p. 64—94.

なお、Cl. Morhange-Bégué の *La Chanson du Mal-Aimé*. (1970) は、この M. Riffaterre の方法論により分析されている。第一部は *Analyse stylistique*、第二部は *Structures du Texte*. となっている。

けであるが、ここ十数年間の種々な方法論を *exhaustif* に網羅することは不可能に近い。⁽⁸⁰⁾ ここでは考察し得た二三の傾向内至は方法論を付記するにとどめておく。その一つに B. Dupriez の “*Stylémique*” がある。文体なるものが作家の行為の構造とすれば、*stylistique* な記号はその構造の構成要素でありそれを “*stylème*” と呼ぶ。*stylème* の総体が “*stylémie*” であり、各作家により異なる *stylémie* の学が “*stylémique*” であるとする。そして *variantes* を重視し、これを作家の言語と置換 (*commutation*) することによりその文体を評価するという方法論である。⁽⁸¹⁾ また P.-R. Léon の *Phonostylistique* がある。これは文字通り音の *stylistique* であり、こうした道も可能であることを示唆している。⁽⁸²⁾ J.C. Coquet の一つの試みは、*langue / langage* の *dichotomie* を提起する。*langue* は *non-marqué* なもので、*code* から *message* を作る。*langage* は *marqué* で *message* から *code* を引き出すとする。そして *Stylistique* とは “*langage littéraire et son fonctionnement*” の研究であると論じる。⁽⁸³⁾

さてここに *Stylistique littéraire* の一つの *compte rendu* がある。余りにも多岐にわたる *Stylistique* の方向の *global* な “*redéfinition*” である。それは A. Henry の *Essai de redéfinition*⁽⁸⁴⁾ である。彼は先ず “*style*” についてさまざまな定義を挙げ、*Stylistique* がこの “*style*” を研究対象としたことに混乱の第一の原因があったという。つまり

(80) P. Guiraud : *Essais de Stylistique* (1969) の前半や、P. Guiraud et P. Kuentz : *La Stylistique, lectures* (1970) などが、やや全体的な眺望を与えてくれる。しかし “*écart*” の問題を最初にとり上げた一人である A. Henry や、本文で述べた *Stylistique des intentions* の主唱者である J. Mourout の名は見られない。

(81) B. Dupriez : *Étude des styles*. (1971) p.p. 224—249.

cf. B. Dupriez : *une Stylistique structurale est-elle possible?* in *le Français moderne*. N°. 4. (1971) p.p. 336—344.

(82) P.-R. Léon : *Essais de Phonostylistique*. (1971)

cf. P.-R. Léon : *Forme et substance du corpus en phonétique descriptive*. in *le Français moderne*. N°. 3 (1969) p. 239.

(83) J.C. Coquet : *l'Objet stylistique*. in *le Français moderne*. (1967) p.p. 53—67.

(84) A. Henry : *la Stylistique littéraire, essai de redéfinition*. in *le Français moderne*. N°. 1 (1972) p.p. 1—15.

“object d'étude” と “objectif de la recherche” とを混同したことを指摘する。こうした混乱の中から彼は Stylistique littéraire を再定義しようとする。即ち、

Prenant comme objet le texte littéraire, la stylistique littéraire étudie, dans le contexte historique des œuvres et des auteurs, le problème de l'expression, dans ses détails et dans son ensemble composé.

更にこの定義の épigraphe として、P. Valéry の “S'attacher aux problèmes organiques de l'expression et de ses effets” という定義を付加する。そしてこの中の “organiques” なる語を重視する。何故なら問題は “langage” と “message” との同一化にあるからであり、Stylistique littéraire は “substances” あるいは “thèmes” を考察すべきものであるが、こうした作品の中に現れた matériel な intellectuel な更に affectif な世界と、それを表現する “langage” と絶えず “organiques” な関係において検討すべきであるからだ。なお “style” についての考えは B. Dupriez や M. Riffaterre の考え方に近い。次に A. Henry は方法論として variantes の重要性と、analyse rhétorique の必要性を説く。variantes に関しては、作品の外に存在し近付きがたい “norme” との関係における “écart” のみを考えず、作品は “fermé” な système であることを考慮し、その中で dynamique な集中を示している “faits stylistiques” を検討するために重要なのがこの variantes であるとする。そして analyse stylistique がこのように作品の内部で行なわれる故に、Stylistique は根本的に “Stylistique des effets” である。但し、この “effets” は “résultantes qui font la signification” という意味である。

Rhétorique⁸⁴ については、真に scientifique な Rhétorique が求められるべきであり、それが表現の問題の本質を探求するに必要なものであるという。

次に Linguistique と Stylistique との関係について、A. Henry は厳

⁸⁴ J. Dubois et al. : *op.*, *cit.*

A. Henry : *Métonymie et Métaphore*. (1971) . *Poétique*. N° 5. (1971)

密な意味での *linguistique* な分析をしたものは文体論的に不十分であるとして、*Linguistique* とは一線を劃している。更に重要なことは *Critique littéraire* との間にも差異を認めていることである。作品の価値評価は、*Critique littéraire* の領域であり、作品の表現自体の問題の外にある各要素、状況などを取りあつかうものである。この意味で A. Henry は L. Spitzer と訣別する。彼のいう *Stylistique littéraire* は本質的に作品の内部的な研究であることを考えれば当然の帰結とすべきであろう。

以上 A. Henry の “redéfinition” を検討してきたが、G. Antoine の拡大解釈を狭め、*Critique littéraire* と差異があることを強調した点が最も注目に価する。M. Riffaterre もこの点に関しては A. Henry とほぼ同意見である。そして R. Jakobson の “fonction poétique” を “fonction stylistique” あるいは “fonction formelle” と呼ぶことを主張している。“fonction poétique” は *Stylistique* により明らかにされる言語の aspect と等しいものであるからである。⁶⁵⁾ M. Riffaterre はいわゆる “Nouvelle Critique” を “Formalisme français” と呼び、彼らに対し一応の弁護はするものの、そして “littéralité” の乏しくなった文学批評内至は分析を再建しつつあると希望的評価をするものの、文学作品の意味あるいは構造の探求において、正しい解説に必要なもの、一語にしていえば “style” への関心の薄さを不満とし、自らと越えがたい境界線を引いているのである。⁶⁶⁾

最後にこの小論の結びとして、次のことを提起しておこう。

このような *Stylistique* と *Critique littéraire* との対立は、“Étude de la littérarité”⁶⁷⁾ と定義される *Poétique* との対立である。Centre culturel de Cerisy-la-Salle において1969年に行なわれたセミナーが、この対立を浮彫りにしている。⁶⁸⁾ M. Riffaterre はその対立を次の如く述べる。

La différence entre la poétique et la stylistique, c'est que

⁶⁵⁾ M. Riffaterre : *la Fonction stylistique*. p. 147.

⁶⁶⁾ M. Riffaterre : *le Formalisme français*. p. 285.

⁶⁷⁾ *Langue française*. N°. 3. p. 33; in *Propositions pour un glossaire*, cf. H. Meschonnic : *Pour la Poétique*.

⁶⁸⁾ *l'Enseignement de la littérature*.

la poétique généralise, dissout l'unicité des œuvres dans la langue poétique, tandis que la stylistique cherche à expliquer l'unique.⁽³⁹⁾

これに対し“Grammaire du récit”や“Poétique de la prose”を主張する T. Todorov は反論する。先ず poétique / stylistique の対立に反対し、“fonction stylistique”に問題点ありとする。T. Todorov はあくまで文学作品は孤立したものではなく、“genre”として存在するものであるとする。⁽⁴⁰⁾ この文学作品に対する二つの道は“directions contraires”へと向う。⁽⁴¹⁾ Stylistique も Poétique もその領域を決定し得ぬまま、また新しい対立へと進むであろう。文学作品は今日の sciences の領域へ、そして規則へはまり切れない例外として残るであろう。その探求者は更により遠くへ行かざるを得ず、またそれは I.-M. Frandon もいう如く、⁽⁴²⁾ 探求者の意志に反してである。

(この小論は、1971年11月23日、佐賀大学において開催された、九州フランス文学会での発表に加筆訂正したものであることをおことわりしておく。)

(39) *Ibid.*, p.p. 332—333.

(40) cf. T. Todorov : *Littérature fantastique*. (1970)

(41) *l'Enseignement de la littérature*. p. 372.

(42) I.-M. Frandon : *op., cit.*, p. 116.